

UU ユー・ユー・ナウ now

OB. OG. INTERVIEW

地球をちねんぐり描く

日本画家

松本 哲男

CONTENTS

- 1 OB. OG. INTERVIEW
- 4 特集 「里山科学センター」
- 6 地域貢献REPORT
- 8 Welcome to 授業
- 9 Welcome to 研究室&ゼミ
- 10 研究keyword / 私の学生時代
- 12 UU News / サークル紹介
- 14 学生アンケート 宇大生は今!
- 15 INFORMATION

地球をちねんじつと描く

日本画家で東北芸術工科大学名誉学長の松本哲男さんを、宇都宮市内の自宅アトリエに訪ねた。体育館を思わせる天井高の広いアトリエに踏み入ると、世界三大瀑布の一つ、南米・イグアスの滝を描いた幅6メートルに及ぶ迫力ある大パノラマが目飛び込んでくる。大地に坐り、五感で大自然を感じ、その感動を描くことを大切にしている松本さんの代表作だ。「僕は地球をまるごと描きたいんだ。まだまだ描ききっていない」と語る。

(取材/教育学研究科1年・藤島生、教育学部4年・鈴木文香、同3年・森真実)

コロンブスの卵

宇都宮大学を卒業し高校の美術教師として赴任した那須の地で、日本画を本格的に描き始めた。下宿先の目の前に広がる那須の山々がモチーフだった。

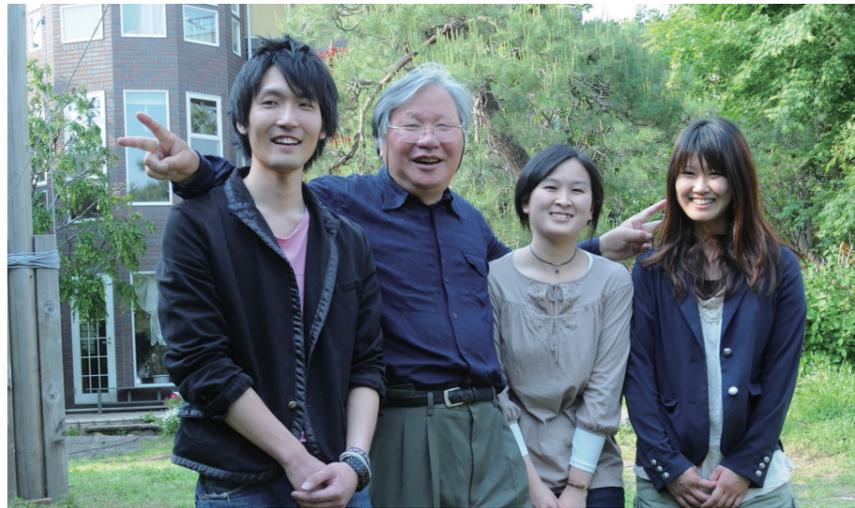
学校へ向う。純真な生徒たちとのふれあいは楽しかった。教師として過ごす8時間は、とことん生徒たちと向き合うと心に決めた。学校で自分の絵を描くことはなかった。下宿に帰ってからは毎日8時間、絵を描くことに没頭した。「この時間だけは自分に決まらうそをつかない。命がけ



プロフィール

松本 哲男【まつもと・てつお】

1943年、佐野市生まれ。68年、宇都宮大学教育学部美術科卒。県立那須高校に美術教師として赴任。69年、再興第54回院展《冬山》初入選。74年、再興第59回院展《山》日本美術院賞(大観賞)。83年、日本美術院同人推挙。89年、再興第74回院展《エローラ(カイル・サナータ寺院)》文部大臣賞。93年、再興第78回院展《グランド・キャニオン》内閣総理大臣賞受賞。05年、『松本哲男展 世界三大瀑布完成を記念して』(宇都宮美術館)開催。06年、東北芸術工科大学学長就任。11年、同学長退任。現在、同大学名誉学長



松本さんのアトリエで(左から藤島、松本さん、鈴木、森)



学生時代の松本さん(1967年頃)

そこから抜け出すまで頑張るしかない。その教えはずっと持ち続けていた。出世作『山』は、完成までに2年かかった。毎日山を眺めていたが、どうしても描けない。春霞が美しい山、夏の若々しい山、秋の紅葉した山、冬の雪山を地べたに坐ってずっと見ていた。すると、「絵が描ける」と感じる瞬間がある。「暗闇の中、ウイスキーを飲みながら山に向ってると、向こうから山が匂ってくる、見えてくる。山が語りかけてきた。」「山から逃げない。これは宇都宮大学で学んだ精神です。目の前の現実に向き合い、自分のものにするまで



制作の過程を学生たちに話す松本さん(アトリエにて)

の強い気持ちで絵に向った。絵の描き方を教えてくれる人は周りに誰もいない。ただ、目の前にある雄大な自然と対峙しながら、極細の面相筆で樹木の一本一本をこれでもかというほど緻密に粘り強く描き続けた。「山を歩いたときに感じた土や樹皮の手触り、匂いを思い浮かべながら毎晩、樹木を10本、なめるように描いた」。1万本ほど描いた時に林の絵になっていた。

「絵を覚えてくれる人が誰もいないことを逆手にとつて、人がやらないことを苦しまぎれに見つけ出した描き方でしたが、『これこそ絵だよ』と認めてもらえた。まさにコロンブスの卵だった。絵とは難しいものだと思いついてたのかもしれない。そうじゃない。自分が思ったとおり、感動をそっくりそのまま描くことが大切なのです。」

食い下がり、絶対逃げない。モノを創るとはそういうこと。平川先生の教えです。」

もう一度、人生をつくる

この3月まで5年間、山形市にある東北芸術工科大学の学長を務めた。都会の大学に比べれば決して恵まれた環境にあるとは言えない。「何にもないことを逆手にとつた。あそこには抜群の自然がある。星が満天に輝く、こんな素晴らしい場所ほ他にない。自然の中に坐ろう。そして風のざわめきや体に感じたものを絵に描こう。大地に坐ると見えてくるもの、感じてくるものがある」。松本さん自身が那須の山中で、絵と真剣に向き合った生活のなかでつかみとつた創作スタイルを、山形の学生に諭すように伝えた。

学長退任後、一人の日本画家として、「もう一度、俺の人生をつくる

現実に向き合い、決して逃げない

「若きし頃、絵の友達ではなく人生の友達に恵まれた」と松本さんは語る。生き方を教えてくれた友達(恩師)の一人が、宇都宮大学美術科の平川晋吾先生である。美術科の同期10人のうち男は松本さん一人だけ。「いい気になって斜に構えていたところがあった。平川先生からしこたま怒られながら育った」と述べた。「『おまえは何もわかっていない。空(くう)を見ている』と言われた。頭の中の世界ばかりで、現実を見ていない。」

「絵の前から離れちゃいかん」と教室に閉じ込められ、「ちくしょうと思いつながら」一週間絵の前に居続けたことがあった。夜遅くまで、ストーブの火が消えているのも忘れ2人で語り合った。「生きることに対して逃げちゃいけない。もがき苦しんで、



作品 第87回院展「ヴィクトリア・フォールズ」(ジンバブエ) 日本美術院同人 松本哲男 2002年(平成14年)

ていく。悔しいけど、いまでもどうやって描いたらいいかわからないことがある。そういうときは原点に戻るしかない」と語る。「地球そのものを描いて写生を終りにしようと思っている。まだ終わっていない。南極や北極があるし、南米やヨーロッパにもスケッチし足りないところがある。そこを全部自分の足で回る。ワクワクするよね。」